

平成29年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立揖斐特別支援学校

学校番号

108

自己評価

1 学校教育目標	児童生徒がもつ可能性を最大限に伸ばし、可能な限り地域社会に参加していく基礎的・基本的な力を身に付けることができるように、次のことをねらいとする。 ・児童生徒一人一人の障がいの状況や特性、発達段階等に応じたきめ細かい教育支援を行う。 ・仲間や地域と共にくましく、明るい生きる力を育む。 ・児童生徒が主体的に社会参加するための必要な基礎的・基本的な知識や技能を培う。
2 評価する領域・分野	◇小学部
3 現状及び保護者を対象とするアンケートの結果分析等	・学校評議員会では、「児童生徒が明るく元気である。」という評価をいただいた。引き続き児童一人一人が学校生活を楽しみながら将来に向けた力をつけていけるように、職員が十分話し合いをし、地域や外部機関を生かし連携しながら教育活動をすすめていく。
4 今年度の具体的かつ明確な重点目標	○児童の実態を正しくつかんだ上で、グループで十分に話し合い、活動内容や支援の仕方を工夫し、「主体的・対話的で深い学び」を観点に、児童が「できた・わかった」という達成感のもてる授業をめざす。 ○一人一人の課題を明確にし、発達に応じた成長を図る。 ○地域との交流を学習活動の中に位置付ける。 ○保護者や外部機関との連携を図った指導をする。
5 重点目標を達成するための校内組織体制	・学部会、グループ会（行事等の役割分担、個別の課題の共通理解と改善・授業の工夫） ・チーフ会（行事、授業等に関するグループからの様々な意見をまとめる） ・ケース会、支援会議（個々の課題を明確にし、対応や指導を図る）
6 目標の達成に必要な具体的取組	（1）グループ内で研究授業を行い、事前研究・授業実践・事後研究を通して、研究内容にかかわって授業を工夫・改善する。また、普段の授業でも単元や月ごとにグループで反省し、それを踏まえて次の単元や題材について話し合う。 （2）☆本を利用して、系統性のある教科学習を「チャレンジタイム」の授業の中ですすめる。 （3）地域との交流を意識した活動を年間に位置づけ、単元計画や行事計画を立てて取り組む。 （4）学級経営、保護者との連携、児童への指導等について、学級やグループで抱え込まず、適時ケース会や支援会議を開いて、共通理解し対応や指導にあり方について相談し、実践する。
7 達成度の判断・判定基準あるいは指標	・児童の発言や様子 ・職員の意見、反省や評価 ・保護者からの意見や感想 ・学校評議員からの意見

8 取組状況・実践内容等	(1) ねらい、支援、教材教具等についてグループの職員間で十分な話し合いをし、授業実践をおこなった。 (2) 教科の段階表や☆本を利用して、児童の実態や発達にあった学習をすすめる。 (3) 居住地校での直接交流、谷汲小学校との交流、また地域への校外学習などに取り組んだ。 (4) 適宜ケース会議や関係機関との連携会議などを行い、関係者が共通理解して対応した。
9 評価の視点	評価
・「できそう、できた」「知りたい。分かった」と達成感を感じる授業の工夫・改善ができたか。 ・児童の実態や発達に即した教科学習ができたか。 ・地域の人々と積極的に関わる交流活動などを仕組むことができたか。 ・保護者や外部機関と連携し、適切な対応・指導を図ることができたか。	(A) B C D A (B) C D A (B) C D (A) B C D
10 成果・課題	総合評価
○研究授業ももちろんであるが、普段の授業でもグループ内で一人一人の児童の実態や課題を踏まえて、改善、工夫して一人一人が達成感を味わうことのできる授業作りに取り組んだ。また、単元ごとや月ごとの反省を行うことでそれを次の単元や授業にいかすことができた。 ○少人数のグループで話し合うことより、気軽に困ったことを相談し、共通理解して児童の指導・支援にあたることができた。また、チーフ会を設けたことで、一人一人の意見が吸い上げられ、小学部としての課題を共通理解し改善策を考えることができた。 ○教科の段階表や教科書の指導書を参考にしながら、個別の課題についていろいろな角度から内容を考え指導することができた。 ○居住地校交流をすることが相手校にも定着し、打ち合わせをすることで児童にとって地域の友達と関わる有意義な活動を行うことができた。 ○各学年の生活単元や教科学習と絡めた校外学習、谷汲小学校での遊具遊び、居住地校交流等で地域の人たちとかわることができた。 ○学部全体で児童を見ていこうという雰囲気があり、相談しながらすすめられた。 ○連絡帳や電話での丁寧な対応で、保護者と良好な関係を築き、協力して指導することができた。 ▲来年度、小学部の人数がぐっと減り、特に準ずる教育課程の児童は1名となる。担任と1対1の授業となると友だちと意見を交わす場もなく学習の幅が狭くなる。また、重複学級の児童が2名となるが、実態が大きく違うため、授業の組み立てが難しい。知的障害学級も合級での活動を効果的に仕組む必要がある。 ▲1. 2年生の14時40分下校、宿泊学習を5年生のみとするなどこれまでの行事等を見直して実施できた。しかし、まだ職員の業務の負担は大きい。	A (B) C D
11 来年度に向けての改善方策案	・引き続き、グループ会で児童の実態や課題を共通理解し、授業づくりに取り組む。また、単元や月ごとにグループで反省し、それを踏まえて次の単元や題材について話し合う。チーフ会を定期的に設ける。 ・一人一人のねらいを明確にしながら、知的障害学級では、効果的な合級での活動を仕組む。重複障害学級は、知的障害学級や他学部の重複学級との合同授業を考える。準ずる教育課程の学級は他校との交流学习をすすめる。 ・さらに職員の負担軽減につながるような体制を考える。
学校関係者評価 (平成30年2月9日実施) 意見・要望・評価等	

- ・居住地校交流ではこちら側はもちろんだが、相手校にも必ず得るものがあると思う。
- ・積極的に校外に出かけたり、地域の住民としても良い拠点となっている。もっと広く学校のことを発信していったほしい